

lymphoma と報告され、さらに NK マーカーが陽性であるとの報告も見られる、本例もこれに一致し、興味深い1例と考えられた。

II. 特別講演

「悪性リンパ腫の診療の現況」

三重大学医学部第二内科

白川 茂 先生

第24回新潟救急医学会

日時 平成4年7月18日(土)

午後2時～

会場 新潟大学医学部 大講堂

I. 一般演題

1) 新潟市内における消化性潰瘍穿孔例の実態と大網充填術の成績

中村 茂樹・田宮 洋一
松尾 仁之・佐藤 賢治
島影 尚弘・小野 一之
武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

【目的】H₂ blocker (HB) による消化性潰瘍手術の変化を明かにし、穿孔性十二指腸潰瘍 (PDU) に対する大網充填術の再発率を評価する。【対象と方法】1976年から1991年までの新潟市内における消化性潰瘍手術症例を、年次別に検討した。また PDU に対する大網充填術施行症例の再発率を、HB 服用状況と潰瘍歴の有無により検討した。【結果】難治性潰瘍の手術例は、1982年の HB 発売を境に激減し、1991年は人口50万人中3例だった。これに対し合併症性潰瘍のうち、出血例は漸減傾向にあるが、穿孔例と狭窄例は減少傾向がみられなかったが、穿孔例と狭窄例は減少傾向がみられなかった(1991年度はそれぞれ4, 35, 5例)。1991年の PDU 26例に対する治療法は、胃切除が66%に対して大網充填と吸引療法が計34%で、胃温存術式が増えていることをうかがわせた。潰瘍歴のある群とない群の再発率は、HB 投与継続例ではともに0%、投与中止例ではそれぞれ60, 29%で、文献的な単純閉鎖術の再発率と変わりなかった。【結語】消化性潰瘍手術症例は、HB の登場により激減した。大網充填で十二指腸潰瘍の再発率を下げることはできなかった。

2) 冠動脈内血栓溶解療法における各種血栓溶解剤の再開通率について

畠野 達郎・政二 文明 (桑名病院循環器科)
渡辺 賢一 (燕労災病院 循環器科)
鈴木 薫 (県立新発田病院 内科)

当院で1988年～1992年6月までの急性心筋梗塞患者に対して施行した冠動脈血栓溶解療法および組織プラスミノゲンアクチベータ製剤(以下 TPA)の末梢静脈投与の効果を検討した。発症12時間以内に冠動脈造影を施行した50例のうち14例が経静脈 TPA 製剤を投与した群、36例が TPA の静脈投与をしなかった群であった。静脈投与ありの群では最終的には13例92%で再開通。TPA 静脈投与なしの群では28例78%で再開通を認めた。冠動脈血栓溶解療法前に TPA の静脈投与を行った方が再開通率が有意に高かった。冠動脈血栓溶解療法に用いたウロキナーゼ、TPA 製剤の効果は現在までの経験では有意差がなかった。

3) 当院における DOA の実態調査

山上由美子・五十嵐光子
梅澤 祐子・高橋 智子
小林 裕子・角田菜穂子 (燕労災病院外来)
吉田奈津子・平方 静子 (看護婦)
瀧澤 淳・大島 満
渡辺 賢一 (同 循環器内科)

【目的】地域および当院の救急医療の現状を把握するため、過去3年間の当院における DOA 症例について、その実態を調査した。【対象・方法】1989年1月～1992年3月までの間に当院に搬入された DOA 症例を対象とし、必要項目について情報収集し、得られた結果を表およびグラフ化し統計処理した。【結果】過去3年3ヶ月間に当院に搬入された DOA 症例数は111例で、死因別にみると、内因死74例・外因死37例であり、内因死では、心疾患が47例(65%)と最も多く、外因死では外傷が18例(49%)と多かった。来院前に一次救命処置が行われていた例は49例であり、全例が救急隊員によって行われていた。内因死とそれに関連していると思われる既往疾患の関係をみると、高血圧症を既往に持つ症例が多かった。【考察・結論】DOA 症例の救命率向上のためには、救急体制の早急なシステム化の実施と慢性疾患を持っている患者・家族への働きかけが必要である。